

〔目的〕 日英両国とも近代化の程度を示す社会経済的諸指標には似通っている部分が多い。しかし、食生活や食に関する意識については、かなり異なる要素が存在するものと考えられる。ここでは、野菜の利用とその調理を中心に、20～60才代女性を対象として意識調査を行い、限られた地域ではあるが両国間の、また世代間の意識差について検討を行った。

〔方法〕 包括すべき野菜の規定と消費量の算定には、日本側総務府家計調査年報、英国側 Household Food Consumption and Expenditure を資料とした。アンケート調査は両国に10年以上在住の各々日本人女性 750名、英国人女性 400名を対象とした。調査時期等は各各1989年7月に首都圏、1990年7月にイングランド・リーズ市で留置式を用いた。

〔結果〕 回収率は日本側80（英国側63）%であった。（以下カッコ内は英国側数値）嗜好度から野菜は平均的に好まれる食品群であった。摂食頻度は毎食と答えた者57（23）%、/日/回が36（62）%と予想以上に高かった。またこの現状に対する認識としては、食べているほうだと思う53（40）%、今のままで良いと思う43（57）%と答えており、行政統計による消費量と異なる傾向を示した。食卓にとり入れる理由としては栄養面重視が73（77）%第1位であった。さらに身近な野菜3つの名称とその使用理由からは、入手し易さ、調理法の多さ等生活要因から生じる理由が高かった。身近な野菜として認識頻度の高いものは、キャベツ、じゃがいも、きゅうり（人参、じゃがいも、グリーンピース）でその調理法については日本側が多様であった。野菜料理法の情報源は両国とも雑誌・本からが1位を占めた。以上の設問に関し年齢層による差の検討も行った。